

教育改革と同和教育

野口克海

一 はじめに

一昨年の夏、学校給食が原因の〇一五七が発生した際、その後始末という役で一〇月一日に堺市教育長としていくことになり、それから一年半経った。短い一年半だったが、本当に大阪府にいたのでは味わえないような直接学校現場、市民、保護者とぶつかる体験をした。

その時の気持ちは、「『公』にして『民』の教育を―地方教育行政の現場から―」という岩波講座『現代の教育』全集に書いた。給食に関して思ったことをメモったものである。

そういう体験もふまえながら、教育改革の中で同和教育の観点から見た時に、私は、いくつかの疑問を現在感じており、それらの問題点について考えてみたい。

力である。

三 改革のおもなポイント

以上の三点を「臨教審」は強く打ち出したが、今日の教育改革のいちばんの根本理念として、今日でも厳然とその理念は、生きている。そのこと自体、基本的理念は、時代に合った方向性だろうと思う。一二年ほど前の「臨教審」の答申を受けて、この間、「中教審」、「教課審」、生涯学習審議会などさまざまな審議会を通じ、現在、改革は文部省を中心に進められている。

四 問題点

1 トップダウンからボトムアップへ

今日の教育改革のいちばん心配な点は、トップダウンで進められていることである。「臨教審」の精神そのもの、「個性尊重、過度な受験競争緩和、生涯学習社会の実現、あるいは、時代の変化に対応する力をつけていこう…」といった理念そのものは、いいことだ。

いいことだったら誰がしてもいいだろうといわれるかも知れない。それは確かにそうで、文部省が行おうが、

二 今日の教育改革の理念

文部省を中心に進められている教育改革の理念というのは簡単にいえば、一九八五年、中曽根総理の時に「臨教審」が設置され答申を出した。その答申には、大きく三点の柱がある。

一つは、「個性の尊重」。これまでの画一的な教育の反省の上に立って、個性の尊重を強く打ち出す。

二つめは、「生涯学習社会の実現」。裏を返せば、過度な受験競争、学歴偏重社会を潰して、いつでもどこでも誰でも勉強できるような生涯学習社会を作ろうということ。

三つめが、「時代の変化への対応」。高齢化、国際化、情報化、環境問題などなど、地球時代の変化に対応する

組合が行おうが、よいことは誰がやってもよいことに決まっている。ただ今回の教育改革の中身が、実はトップダウンで何を訴えているかといえば、権力を集中するということではなく、教育の地方分権、はつきりいえば、「国が大学の責任を持つ」、「都道府県は高等学校の責任を持ちなさい」、「小・中学校は市町村でやりなさい」と、このようにきっちり分けようというぐらゐ地方分権が提起されてきている。

「どうぞご自由に地方でおやりなさい」ということを上から言われている。二〇〇二年からの学校週五日制で、「総合的な学習の時間」というのがある。「教科書なしで、小学校三年生から高等学校まで、週二〜三時間持ちなさい。その中身は、情報教育をしようが環境教育をしようが、各学校で自由にカリキュラムを作って下さい」というものだが、二〇〇二年からできるはずがないと私は思っている。

中学校や高校などで「総合的な学習の時間」という、そんな免許を私は持っていない「社会の免許しか持っていない」「英語しか持っていないのに、国際理解など社会の先生にしたらって下さい」と、教師が、もし拒否したら、一体誰が担当するのか。

うちの学校は子どもの実態の上に立ってぜひこういう

問題をしよう、福祉・教育のことを柱にしよう。そんなカリキュラムを現場が作り得る力があるかといえば、正直なところない。せいぜい、このまま走っていけば、受験に役立つ英語でもしようかというようになってしまふ恐れがあり、学校現場で受け止める力がない。

つまり、トップダウンで「自由にどうぞ」「教科書なしで各学校でおやり下さい」と中央から市町村に「義務教育」お任せしますよ」といわれても、丁度最近の小・中学生の子ども達に「自由に遊びなさい」といっても、「何をして遊んだらいいの？」と、遊び方まで指示してもらわないと遊べないと全く同じような状態が、市町村の教育委員会の姿であったり、学校現場の姿ではないのか。

文部省から「どうぞ自由に」といわれて、総合的な学習の時間はどうすればいいのか、ゆとりの時間はどうすればいいのか、指示されればゆとりもなくなってしまうのだが、要するに「指示待ち族」の子どものごとく学校現場や市町村の教育委員会が、「地方分権」といわれて困ってしまったという実態がある。

私は逆に、「地方にこういう権利を与えよ」とか「勝手にさせてくれ」というのは下から勝ち取るべきもので、その下から勝ち取るべきものが、今、上から与えられて

教育委員会と学校との関係でのボトムアップをどう考えるかということでは、今まで教育委員会は学校を指導したり、指示したり、監督したりという関係だったが、学校現場が「うちの学校はこうしたい」というものを支援するのが、教育委員会の仕事であり、「指示型」から「支援型」のボトムアップの教育委員会にならなければいけない。

教室の中もボトムアップ、学校と地域の関係もボトムアップ、学校と教育委員会の関係もボトムアップ、都道府県と国との関係についても「大阪はこうするぞ！」というようなことを打ち出していくようなボトムアップが必要である。本当に実力・中身の伴った教育改革を実現しようとするれば、改革の矢印を逆さまにしなければ中身の伴わないものになる。

2 公にして民の教育を

最近の公立学校の教育、公教育は、特に中学生を中心として連続して「荒れる中学生」による事件が起こっている。昨日(三月一〇日)の朝日新聞朝刊一面には、大阪府警本部が大阪府下中学校卒業式に二、〇〇〇人配備、だとか書かれていて、「もうどうなっているのか」という感じである。

いることに非常に危険性というか、形骸化する恐れを感じている。

中身の伴ったものにならないうと思えば、今進められている教育改革は、確かに理念はいいことをいってはいるが、ボトムアップでいかにないことには、本物の中身・力をもったものにならない、この危険性がいけば大きいように思う。

例えば、教室の中でのボトムアップとは何か。今までの教育は先生が黒板の前に立って、子どもに教科書の大切なところを覚えさせたり、知識を注入したり、上から下のトップダウンの授業をしていた。子どもの意見、子どもの実態、子どもに考えさせて、子どもの声に先生が耳を傾けながら、子どもが中心になった授業に切り換えていこう、知識注入だけの教育では駄目だというのが、教室の中でもボトムアップすることだろう。

そして、学校教育ということを考えて、地域の声、本来に地域のいろいろな団体や保護者、PTAなど、地域の声をしっかりと聞きながら、学校経営に地域も参加してもらおうというボトムアップの学校を作りなさい」といわれているのに、学校は門戸を開こうとせず、一方的に教えてやるというような体質をなかなか変えようとしていない。

「公立の中学校には怖くて行かせるわけにはいかない」と保護者、府民、市民は、まさに「むかつく中学生」「キレる中学生を恐れている。「うちの子どもを安心して学校に行かすことができない」という保護者もいる。

先日「いじめ対策会議」で議論していたら、誰かが「最近の問題行動は、地雷型」だといっていた。見えないけれど、踏んだら突然何が起こるか分からないという理屈だろう。

「突然キレる子ども達」ということをいつている人がいたが、「見えない」というのはおかしい。やはり、見えるはずだ。教師は見えるし、予想できないといけなはずだ。予想できない子どもが、予想もつかない出来事を起こしていくということが、連続して起こっている。

こういう実態で公立不信。小学校高学年では学級崩壊がいつぱいある。

例えば、適応指導教室の相談員の先生の話だが、登校拒否の対応で中学校の先生は上手になってきたが、小学校は(登校拒否の対応が)うまくないらしい。なぜかというと中学校は、生徒指導主事がいて、学年主任がいて、担任がいて、「この登校拒否の子どもをどうしよう」という相談をチームを組んで対応して、適応教室にも相談に訪れる。

その点、小学校の登校拒否は、担任の先生が「私がやります」と責任感を感じて抱え込んでしまい、教頭すら入れない。しかもいわゆる「しつかりしている」といわれる先生ほど質（たち）が悪く、登校拒否を治せない。

「この子は私が責任を持ちます」と（担任が）抱え込んでしまうものだから、余計に登校拒否が悪くなる。中学校のように、チームを組んで集団で対応してくれたらいいのに、小学校から相談を受けた時には、大変な手遅れになるまで大抵ほったらかしになる。

頼りない先生なら「お願いします、教頭先生」とかいつて、いつの間にか校長も入ってチームができるのだが、小学校のしつかりしたといわれる先生ほど登校拒否をひどくする、というような状況を（適応教室の先生が）おっしゃっていた。

事ほどきょうに、公立小・中学校あわせて市民から大変な不信感を持たれているにも関わらず、公立校は驚くほど競争がな過ぎる。隣の学校に負けても倒産する心配がない。

同時に私は、「無競争」ということは「無責任」にも通じるし、倒産する心配がないということは、無責任に通じると思う。

〇一五七である保護者がいちばん怒っていたのは、

こういう体質が依然として続いている。本当に今、こういう状態を破ろうと思えば、私は公立学校に「民」の力を取り入れていかないと生き延びていけないと思う。「民」の力というのは地域の教育力である。

公立学校が私立学校に負けないようにしようと思えば、二つある。一つは、地域と一緒に学校運営をする、学校教育ができる地域の財産。「おっちゃん、ちよつとこれ学校へ行つて直接子どもに教えたつて！」と会社の人達や保護者に来てもらつて、「先生が教えるより、あんた教える方が上手や」といいながら、一緒になつて部活動、スポーツの指導、勉強の指導も保護者も一緒にする。

要するに、私立は地域性をもたないだけにそれができない。公立は地域ごとに「おらが村の学校」というものをきちつとしながら、地域性を発揮すること。

もう一つ、私立と違つて公立には多様な子どもがいる。勉強のできる子ども、できない子どもいろいろいるから、そういう多様な子どもがいるだけに、それをプラスに生かせば豊かな人間性、人間教育ができる。スライスされた子ども達にはない面白さ、そういうものを公立学校がどう生かすかということで、それをやりきるためには、地域ごとに一緒になつた「民」を取り入れる、そういう学校経営をしなければならぬ。学校を公園のようにして

一緒に教室で給食を食べた担任の先生達が、保護者に対して、「学校で大変な目に遭わせまして申しわけありません」ということを言わないということだ。担任も一緒になつて「私も被害者だから」と親に言っているけれど、親にすれば「運う！あなたに子どもを預けたのに、大変な目に遭わせて申しわけありません」という罪の意識がない」ということだった。

それを指摘したら、「私達は食べる指導だけで、作る指導と違う」と主張する。校長も含めて、公立学校の責任者は一体誰かということで、その点、無競争で倒産する心配がなく、無責任という公立学校の体質が問題であると思われる。

また、サービスも悪すぎ。「ノー・サービス」である。ソ連が滅びたのもこれじゃないかと私は思っているのだが、私立学校に比べると、サービスが足りない。

いちばん悪いのは「前例主義」、去年の通りである。先日、私は四〇歳ぐらいの女性から、「先生！久しぶり」と肩を叩かれ、「私の子どもがこの前小学校に入學して入學式に行つたら、式の内容から建物からみんな一緒だった」といわれた。本人は懐かしさを強調しているのだが、三〇年間変わらない学校、しかも倒産しない学校とは一体何なのか。

しまうということである。

このような形で、親の、地域の税金でつくっている学校だから、地域で責任を持ちましょうという状態を作りださなければいけないのだが、そういう点が今日どこまで、学校週五日制導入の二〇〇二年頃までに破れるかということに非常に不安を抱いている。

先程、登校拒否の例を出したが、隣の学級との壁すら破れない小学校は、「うちの学級」という意識が強すぎる。五・六年生の学級に教科担任制を導入するように、一組と二組の先生が国語と算数を交換して、多感な思春期に入っているのだから、いろいろな先生に教えてもらえといつても、「あんな先生に教えてもらつたら、せつかくのいいクラスが無茶苦茶になる」とか、学級の壁すら小学校では破れないのだから、学年の壁も破れないし学校の壁もとても分厚くて破れないというのが、今の状況である。

3 教育界の不良債券の回収を

この頃、不良債券が流行っているが、私は教育界に不良債券を発行した犯人は、一つは文部省や教育委員会、つまり「行政」がこれまで戦後五〇年いっばい不良債券を出してきたと考えている。

同時に、組合の側も今日教育界にいくつかの不良債券を発行したまま、回収していない。

それぞれ、発行元が責任を持って回収してもらわなければならぬと思っている。文部省が出した不良債券というのは、今日の教育界の病根といわれる、過度の受験競争を作りだしたことだ。「追いつけ、追い越せ」の時代に均質な労働力を提供するために、画一的な教育を実施してきた中で、物差しが一つ、みな同じ主義、偏差値で人を判断するという、そういう教育界の病根のようなものは、やはり行政側の責任としてある。

これを今、文部省自身が生涯学習社会への移行ということで回収にかかっているわけだが、全て教職員組合とはいわないが、教職員組合が出してきた不良債券もやはり、世間の常識では考えられないようなことが学校現場にはある。

たとえば、教育委員会にいて、「午後四時半を過ぎたら学校の先生が、スーパーで買い物をしています。先生の勤務時間は何時ですか？」と市民から質問がきた。そこで、校長に「どうなっているのか」と聞くと、「昼休み、給食もあつて、休憩がとれていないから、教員の休憩時間は後ろに持つて来ています。四時半から五時十五分迄が休憩時間です」という。休憩とは真ん中に持つてこ

に」といわれる。確かに、平均給与は九五〇万円である。給食を年間一八五食作るだけなのだが、「給食のない時に調理員が何をしているのか。この春休みから四月の変わり目のところまでの毎日毎日の勤務の様子は？」と昨日も与党の会派から問われたのだが、学校現場に世間の目から見た時に、これはおかしい、やり過ぎだと映つても仕方がないような勤務の実態がある。

あるいは、言葉遣い、先生の服装、こんなことは言いたくないのだが態度も含めて、本当に保護者、市民から不信を買う、批判されても止むを得ないと思うような実態がある。

家庭訪問に行けば、運動靴の後ろをペタペタ踏んで、「こんにちには、担任です」という後ろ姿を見て「あんな踵を踏んで靴を履いているような先生にうちの子が習うのか：」と思うと、親も不安に思うだろう。それは、「申しわけありません」といわなければしょうがない。

こういうことが、非常に堂々と当たり前で通るような社会を作つて来た側がもう少し自己反省をして、互いに厳しくやろうということをしなないと、市民に信頼される地域・保護者に信頼される学校作りにならない。本当に潰れてしまうという実態があるので、そういった不良債券を本当に早急に、教育改革が進められているこの時期

ければ、休憩とはいえないのじゃないかというのが、「四時半になったら遠慮なしに帰っていたら、もう四時頃」と校長はいう。「ちよつと静かだったら、もう四時頃に先生方は黙つて出ています」という小学校もある。

四時頃に先生が近所のスーパーで買い物をしていれば、保護者もやはり「先生つていいなあ。早やく帰れるし、夏休みも長いことあるし：」と思うだろう。「夏休みは自宅研修」といっても、「そんなことはない。いつも遊んでいる」と、みんな知っている。

教育労働者としての権利を勝ち取ってきたとはいえるのだが、世間の目から見ると「そんな甘いものではないだろう」と批判された時、「学校週五日制というのは、先生のためですか？」先生が案でいるために五日制にするのか？というように保護者がいう。

私は今では、「楽しんでどうしていけないのですか」と聞き直っている。市議会などでも「二〇〇二年に学校の先生が案をするために完全実施する」とか指摘されるが、あまり言い訳ばかりするのが嫌になってきて聞き直っているのが通用しない。

「学校給食の調理員は春休みに何をするのか？」と聞かれる。「調理室の掃除だ」とか答えても、「何をしているのか。一年間に一、〇〇〇万円も給料を貰っているの

に互いに自分自身に厳しく、自分の責任で不良債券を回収することが求められているし、これをやりきらないことには教育改革も成功しないだろう。

4 選択・競争・評価と義務教育

次は、最も同和教育、人権教育のことと関わつて悩んでいることだが、「選択の時代」である。あまりにも無競争というので競争の原理を入れていく、あるいは、学校に対して評価をきちつとしようということである。こういう問題が今、教育改革の中でどんどんといわれていることと、一定最低必要な、基礎・基本というものをきつと、高校や大学ならば、選択やいろいろな特色というものがある幅にあつていいと思うが、義務教育の段階での限界をどこに置くのかを整理しておかないと、問題が起る。

簡単にいえば、例えば中学校を例にあげると、中学三年生になつてアルファベットの大字、小文字が書けない子がいる。しかし、外国生活もしてきて、英会話が先生より上手な中学生も同じ教室にいるということが、一般的に公立の学校でも平気にあるぐらいに、子ども達の環境もいろいろ多様になってきている。

能力差が凄いい。英語の先生はどのように授業をしてい

るかというところ、しようがないからやはり真ん中に合わせ、教科書を教える授業をしている。やればやるほど、やはりアルファベットを書けない中学三年生は、英語の授業など面白くないし、分らない。先生よりも上手な発音の滑らかな生徒もそんな授業は面白くないから、もう居眠りをするか、「塾の先生の方が面白いし、教え方も上手だ」と、できる子もできない子もそっぽを向く、そんな授業をしている。

今の教科書を使って行っている数学でも英語でもそうなのだが、みんなに分かる授業をめざして、公平で平等な授業で、差別はいけないというようなことを言いながら、当てる回数まで、「あの子は二回当てたから、今度はこの子」というように、発言回数まで平等に気を配りながら、画一的な授業をしている。

それを、言葉は「習熟度別」でも「能力別」でも何でもいいのだが、要するに、子どもが喜んで受ける英語の授業、少人数で伸びる子はうんと伸ばしてやればいいと思う。ABCも書けない子は、その子に合った、その子が面白いと喜ぶような英語の授業をしてあげなければいけない。

今求められているのは「個に応じた教育」である。中学での選択履修、高校の総合学科などは、子どもの数だ

下から湧いて来ます」といわれる。通勤電車と同じ時間帯で子ども（小学生）達が地下鉄に乗ってやって来るということは、東京の場合、小・中学校の通学区はほとんどフリーになっているということだ。

これは、近い将来の大阪の姿でもある。今まで同和加配もたくさん行ってきたのだから、仮に選択の時代になっても同推校に生徒がほとんど集まってくるような、同推校をもっとつくらなきゃいけないといっているのだが、今のところは励ます意味でいっていても、本当にそうならば負けてしまう同推校も少なくないのではないか。残念ながら、これは慎重に保護者の選択権、学校選択権に対応しなければならぬ。

このところが本当に難しい。大阪版・通学区の弾力化をどのように考えればいいのかということをもう少し整理しきれないのだが、今のところ大阪府としては、国の指導を半分削りながら、いじめの問題、通学区の問題、障害を持った子どもの場合などは、今までに比べれば、極めて弾力的に転校を認めているという対応を府ではしているが、そういう選択の時代にどんどんなってきた。

私は、社会的弱者切り捨てが起ころうということ、危惧している。国、文部省が最近出してきている問題は、

け時間割があるような学校を作ろうということだから、一人ひとりの子どもに自分で時間割を作る権利を与えるというような形で進められている。

そういう点でいうと、もう一つ悩ましいのは「通学区の弾力化」である。通学区の弾力化で、各学校に特色を持たせながら、うちはこの学校に行かせるとか、「小学校区ごとの通学区を弾力化せよ」と文部省が強く指導している。

『通学区の弾力化―指導の手引き』というのがあるが、出ている、例えば、いじめがあるという場合には、学校を代わるのは極めて弾力的に認めなさい、通学路が遠い・危険という場合には、通学区を弾力的に対応しなさい、というようなことを強く指導している。

そういう流れでいうと東京など小学校、中学校の通学区を区域ごとにきちっとやっておれば、千代田区あたりの小学校はみんな潰れている。

朝八時になったら、どこ的小・中学校とも地下鉄から子ども達がワァーッと溢れてくる。噴水のごとく、地下鉄から吹き出して来て、千代田区の学校に子ども達が集まって、三〇〇〇四〇〇人の小学校が東京の中心部でできる。

東京の校長先生方に話を聞いてみると、「子ども達は地

例えば中高一貫教育、一八歳までの飛び級で大学まで行けるとか、「伸びる子をうんと伸ばす」ということに力が入っている。

総論ではいいことをいっていたが、各論に入った途端に、最近の文部省が、「中教審」が出してきている案で、中高一貫教育でも安易にすれば受験競争を余計に過激にするだけだとか、一七歳で大学に行ける飛び級制度というのも誰のための教育改革か、大学に行く者など四〇％もないのだから、行かない六〇％の子ども、大学に行かなくても社長、知事にもなれるというような、そんな子ども達が元気になるような教育改革を出してくれればいいのだが文部省の各論に入った段階では、伸びる子、できる子の方に力が入ったような各論が出てきている。そういう意味で、この選択制の問題に安易に乗っかっていったならば、社会的弱者切り捨てになってしまう危険性が非常に高い。

5 二〇〇二年をどう迎えるか

「二〇〇三年学校週五日制完全実施」というのが、「教育改革プログラム」に書かれていたのが、先般閣議終了後文部大臣が「二〇〇二年にします」と発表した。一年早めたわけだ。

「六大改革」といわれる改革の中で、あまり上手く進んでいるものがないので、教育で点を稼ごうとしているのかと思いつながら、聞いていたのだが、要するに、学校週五日制の完全実施が二〇〇二年ということになった、あと四年である。

これは、単に休みが二日増えるという「量」の問題ではなく、「質」が大きく変わる大変なことだと受け止めている。月二回休んでいる第二・四土曜日。教科書は六日制の教科書を使い、六日制のカリキュラムで今、日本の教育が行われている。

つまり、六合の柙に六合の酒を入れていけばいいのだが、今入れ物を五合半に縮めたのに六合の酒を注ぎ込んでいる。今までは縁の辺りにまだゆとりがあったから何とかギリギリだったのが、今度は完全五日制というところ、五合の柙にしてしまう。絶対六合の酒は入らない。そうすると、五合の柙に合うような教育カリキュラム、教科書を薄くしなければならぬ。

しかも、週二時間時間割を減らすだけではなく、総合的な学習の時間を週二〜三時間作りなさいとか、教科書のない時間等もしていくので、各教科の持ち時間は一気に減る。今までに比べて四〜五時間引けば、各教科の時間数が、七割ぐらいになつてしまう。

も保護者から朝電話があつて、「インフルエンザで三八度も熱があるんだけど、学校へ行かせましようか、休ませましようか」と。親が決めるべきことなのに、担任と相談する。そういうのが当たり前だという。

堺でも暴走族で深夜に捕まった子どもについても、警察は家に電話をせずに、日頃から仲のいい中学校の生徒指導主事に電話をする。「お宅の中学校の暴走族捕まえています」「いつもお世話をおかけします」と、(生徒指導主事が)家に連絡をすると、「うちの子どもは二階で寝ています」というように、親は知らない。子どもが夜中家にいないということを知らずに、平気で寝ている親など五万といる。そんな実態が現実としてある。

ひとり親というのは、昔は片親だとか、欠損家庭とかいろいろいい方をしたが、要するに離婚した保護者でひとり親の子どもは学校によつては二五%、四〇人学級で一〇人ぐらゐある。どんどん増えてきている。

ひとり親を悪いなどとはいわない。現実には、そういう中で問題を起こしている子どもも達、あるいは、親と接する時間が不十分な状態で頑張っている子どももいるもの、差が激しいという実態である。

お父ちゃんにしょっちゅう殴られてアザだらけになっている、児童虐待の典型的な子どもの場合、父親は、「う

そういうことかというと、カリキュラムが変わる。時間割の組み方が学校によつて多様になる。教科書が全て薄くなる。そういうことが二〇〇二年に始まる。

その時に、本当にそれをこなしていけるような学校の体制が作れるのか、先生が楽になるだけといわれるようなことがない、新しい教育内容が二〇〇二年にきつと地方分権で学校単位でそれができるかというところ、もう一つ大事なものは、土・日という週二日間が、地域・家庭に返されるということで、学校はその分スリムにはなるが、それを受け止める家庭・地域の力があるかどうかだ。

例えば、中学校の部活動というのは、スポーツクラブ関係は全部地域の社会スポーツクラブにしなければいけないだろうし、コーラスやプラスバンドとか文科系のサークルも、地域の公民館その他学校を使つてもいいが、地域の文化サークルという形に移行していかなければいけない。

家庭の教育力をきちんとできるのか。このところが、大変悲観的にならざるを得ない。特に、最近の若い保護者の家庭の教育力たるや惨憺たるものである。

府にいる時、私はあまり気がつかなかつたのだが、堺市に行つて、校長と直接話をする機会が増え、雑談している中でポロポロ出てきて、「そうか」と思うのは、今日ちはお母ちゃんがおれへんし、頑張らなあかんから、厳しくしつてます」というのに対し、(その子の学校の)校長が、この子を救うためには、子ども家庭センターに相談をかけますと、(私のところに)相談に来たから、家庭センターに行つたり、今、実際にそういうことをしているのだが、本当に家庭の若い保護者で、子育てに自信のない人がたくさんいる。

これを支え合える地域の高まりというのが、どこまでできるのかという不安である。従つて、このままの状態では、トップダウンの教育改革が行われ、二〇〇二年に学校週五日制が完全実施されると、子どもは放つたらかしくなるだけで、(格)差も広がるだけである。

熱心な家庭は子どもを塾へ行かせて、放つたらかし家庭の子どもはいつそう放つたらかしで格差が拡大し、しかも先生が楽になる学校週五日制になりかねないということがあつて、CCP(ふれ愛教育推進事業)でもいろいろと問題提起をしてきているが、二〇〇二年に地域でどう学校、家庭を支え、地域のコミュニケーションの力をつけるのが重要なポイントである。

最近の子どもの現状、「ムカつく」とか「キレる」という子どもの現状を見た時に、いちばん心配するのは、最近の子どもの人間関係の希薄さである。

自分の子どもの例だが、娘が「友達と遊んでいい？、今度の日曜日に友達を四〜五人呼ぶから」というので「それはいいことだ」といったが、実際遊びに来たら、テレビを見る、漫画を読む、パソコンを触るというようにバラバラである。「トランプか何かして一緒に遊んだら？」といったも、「うん、これで面白いよ」といって、バラバラで会話もしないという実態を自分の娘で体験したことがある、そういうのは今当たり前である。

孤独な子ども達。友達が不登校になって、学校に来なくなっても心配もしない状況である。

堺の中学校を見ていても、昔の荒れている中学校では、親分みたいな存在がいて、ピラミッド型の非行軍団があり、ここを抑え込んだら大体、下は収まった。「あれを収めて来い」と教師がいったら、「おぉー」といって非行軍団のトップが、行くという関係があった。

最近では、あつちでナイフで刺していても、なぐり合いをしていても、自分に関係がない、知らないという状況で、別々である。一つの学年なのに、あいつはあいつ。あいつはあんなふうに暴走行為をしているが、自分はそんなことをしない。「注意をしてやれば」といっても「関係ない」というように、恐ろしいほどに孤独で、人間関係が希薄な子ども達である。

人間関係が希薄で、ああいったナイフ事件や、登校拒否がどんどん増えて、誰も心配してくれない「透明な存在」もどんどん増えている。この時に学校週五日制がどんな意味を持つのか。本当に子どもの集団、ぬくもり、あたたかさ、親子のあたたかさというようなものを作り上げていくことを、この時期にしつかり取り組まないとい〇〇二年を境にして格差が拡がり、孤独な子ども達がいっそう孤独になるという学校週五日制になる恐れがあるのではないかと危惧している。

心配していることばかり五点並べたが、逆に面白いと思っていることもたくさんある。地方分権になるということは、それぞれの市町村で自由に面白いことができるということだ。教育内容の点でも、「人権」ということを本心に柱とした教育カリキュラムを作る絶好のチャンスである。教育内容の上で、ポトムが力を蓄えれば、これほど自由にしてもいいといってもらっている最中なのだから、絶好の面白いチャンスなんだという、いわばアラスイメージのこともしつかりいうべきだったが、今日は心配な点をたくさん並べた。そういう点で、弱者切り捨てにならない教育改革ということをしつかり私達が受け止めていかなければならないととらえている。